

ねじりはちまき

10月 神無月 寒露 霜降の月になりました。
10月1日、衣替えの日です。8日寒露で、20日えびす講、23日霜降です。

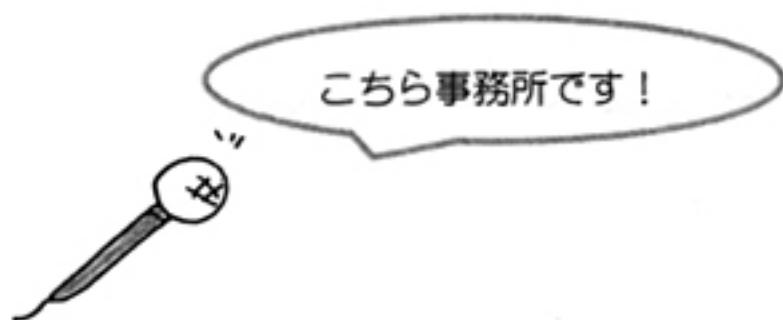
秋の花の1つに木犀があります。この花が咲き始めると、四方八方芳香に包まれますが、1週間程経つと木の周りに円形の輪を描いて花が散ります。金と薄黄がやや早く咲き、銀はこれに遅れて花を付けます。

徳川の時代に中国から渡来し、もっぱら庭園の木として植えられましたが、木肌が犀の皮に似ているのでこの名をもらったようです。
糖類と有機化合物が結合した配糖体で酸が強いので、温度の低い夜や湿度の高い日には一層強く匂います。
この花が咲くと暖かくはならなくて、冬支度の始まりです。

外壁のはがれ、戸の立て付けなど、気になる所があれば直しておくとよいと思します。

幸田 常一

* * * * *



郡山市の現場はお陰様で完成いたしました。
引き続き、本宮市の現場で新築工事を2件お世話になっております。

自転車の話

今回は自転車のことを取り上げてみる。どうしてか。最近自分は自転車に乗っていないが、どうもこれから自転車の存在が重要になってくるのではないかという予感がするからである。どうしてそう思うのか。その点は追い追い話するとして、我が国や外国の自転車活用の現状がどうなっているか、その辺からみてみよう。

先ず我が国では、自転車を利用する環境が整っているだろうか。否である。サイクリングロードとして整備されている所もあるが、全国的に安心して自転車で走行できる環境が整備されているとはとても言えない。自転車も「車両」に当たるのであるが、道路の状況は自動車優先の状況にあり、自転車走行のスペースは確保されていない。そこで自転車が歩道を走行することが多く（自転車も歩行者感覚というか・法律では禁じられていない）、人身事故を起こす原因にもなっている。これには自転車が本来車両であるという認識が欠けている点に問題もある。このことは自転車のマイナスイメージを形成してしまっている。駐輪場始め各所に放置されている自転車も困りものだが。それでも通勤や通学に自転車がもっと使われていいと思うが、なかなか広がらない。車道を自転車が走行する光景が当たり前として見られる状況にはない。見かけると珍しいと思ってしまう。例えば4号国道で郡山北工業高校の生徒が歩道を自転車で走行しているのを見かけることがある。国道で歩道が整備されているからだ。また、自動車を運転している時、偶に車道を走行している自転車を前方に認めたら、対向車の関係で追い越し出来ないと、つい邪魔だなと思ってしまうことがある。これではいけないと反省するが、皆さんはどうだろうか。

そもそも自転車利用についての人々の意識だが、先ず各家庭に1台はあるものだろうか。あればどんな時に利用しようとするのか。遠方は自動車になるが、歩いて用を足せる程の近い所へ行く時自転車を利用する、歩行者感覚といったところだろうか。サイクリングは別だが。そういう小生は家に孫の自転車があるものの、ほとんど利用していない。車道を走行するのは危ないと思ってしまっている節がある。どうも田舎の方が自動車依存の傾向が強いように思う。それでも全国的にみると東日本大震災以降は通勤に自転車を利用する人が確実に増えているという。万が一のことがあった場合の危機管理意識がそうさせているのかも知れない。いわば災害教訓から学んだ結果といえようか。

次に西洋の自転車事情を見てみよう。中でも「自転車大国」といわれるオランダについて見てみたい。オランダが＜自転車中心＞に転換する切っ掛けは何だったのか。1950年代から1960年代にかけて自動車が急速に普及したのはオランダも他国と同様だった。それに伴い自転車は道路の縁に追いやられるし、また交通事故による死者の数が増えていった。その死者数の中には子どもがかなり占めていた。そういう事態を目の当たりにして、子どものための安全なサイクリング環境を求める社会運動が起こるとともに、1973年に起きた石油危機（産油国が禁輸に踏み切った）が自動車の安全性と持続性を大いに揺さぶったのである。この二つのことが、オランダ政府が自転車のインフラ整備に本腰を入れるのを後押ししたのだった。そこでオランダの都市開発は、他国が取っていた自動車中心の道路建設方針から脱却して独自の道を歩むことになる。それに基づき、サイクリングを安全にし、多くの人が利用できるようにと自転車専用道路の巨大ネットワークが構築されることになるのである。専用レーンに自転車専用であることが標識で明示され、専用レーンはもちろん舗装されている。また、追い越し可能なように十分な道幅が取られている。このようにしてオランダの都市の多くでは、自転車専用道路は自動車交通網から完全に分離されている。所によっては分離が不十分で両者が混在しているところもあるが、そこでも「自転車優先」との表示がなされている。また、オランダによくある円形交差点（ラウンドアバウト）でも自転車に優先権がある。それと、オランダには駐輪場もよく整備されていて、例えば大学都市といわれるクローニンゲンでは中心部の駅地下に1万台の駐輪場

が完備され、入り口でどこに駐輪できるか電子カウンターで表示されるというのだから、恐れ入ってしまう。以上オランダの自転車事情であったが、他にもドイツ、ベルギー、フランスなど日本に比べれば遙かに「自転車先進国」といえる。とにかく自転車専用の道路整備が進んでいるのだ。いずれの国も自転車も交通手段の一つとして、体系化された価値観が具現化されている。その例の一つとしては、事故の起りやすい交差点では自転車専用の信号機まで設置されているのである。また、サッカーを始め人気スポーツがあるが、自転車に関するスポーツとして自転車レースが盛んで、それが大人気になっているということだ。それはロードレースとして行われる。県内では葛尾村で行われたように思う。

また、西洋の自転車事情では、ロンドン市の自転車革命が話題になっている。オリンピック後、市民の意識が変わって、自転車シティに生まれ変わろうとしているのだ。その一つが自転車先進国のオランダに見習い、「ミニオランダ化」による自転車にやさしい街づくりを目指すもの。商店街（寂れつつある）から自動車を排除し、バスと自転車のみの通行を認めて、歩行者と自転車を呼び込もうというものだ。ロンドン市の3地区でその取り組みがなされている。その二つ目は、サイクルスーパーハイウェイ建設計画の推進である。実現に向けては乗り越えなければならない課題があるとのことだが、実現すべしとの世論は盛り上ってきているということである。余談だが、自転車は交通ルールを守らないという批判がロンドンにあったが、自転車利用者側に「ルールを守る道路ユーザーになろう」という意識の変化が顕著になっているということだ。これも大事なことではある。

さて、日本の話題に戻ろう。平成29年5月に「自転車活用推進法」が施行されたことはご存知だろうか。この法律の基本理念は、公共の利益を増進させる自転車交通を拡大するというものだ。つまり、自由な移動、健康増進、環境保全、災害時の有効性といった自転車の利点に着目して自転車活用の推進を図るねらいだ。この法律制定を促したのが、東日本大震災であり、ロンドン市の自転車革命の動きであったといわれる。ところで、この法律によって何がどう変わろうとしているのか。その点は、現在国土交通省に設置された「自転車活用推進本部」が策定している推進計画を待つ（いつ頃発表になる？）ことになる。法律制定の立役者であるNPO法人「自転車活用推進研究会」理事長の小林成基氏は「日本独特の課題への取り組みを忘れてはならない。自転車の歩道通行を世界で唯一合法化している日本として先ずやるべきことは、車道の左側通行を常識とすることだ。これは安全確保のために不可欠だ。」という。いわれてみると、もっともなことだと思う。自動車優先と歩行者優先の狭間で揺れ続けている自転車の交通上の立ち位置を明確にする必要がある。ところで、今回自転車の話題を取り上げたのは、先に述べたようにこれから自転車の存在が重要になって来ると思われるからだ。それは専ら環境への負荷の観点からだ。環境に負荷をかけない交通手段が望ましいと考えてのこと。もちろん自動車も電気自動車への移行が世界的潮流になってきており、燃料電池車も登場し、環境への負荷を削減しようとしている。しかしもっと言えば、自転車は自動車に比べて省資源である点、自転車は自然や人との触れあいが深まる点や体力を使って健康増進につながる点が違う。これは一種のアナログの世界だ。経験的にいってお分かりになると思う。偶には便利さ、能率だけを追求する仕事や生活から抜け出すこともいいのではないか。のんびり、ゆったりとする時間を持つことが明日への英気を養うと思う。今回はこれで終りとする。

中央アルプス（木曽山脈）越百山・南駒ヶ岳・空木岳 縦走

【今回登った山の概要】（◎は日本二百名山、○は日本三百名山）

8/26~28
・木曽側から三百名山、二百名山、百名山を周回。
・小屋泊。越百小屋、木曽殿山荘

- 1 越百山（○こすもやま、2614m）
- 2 南駒ヶ岳（◎みなみこまがたけ、2841m）
- 3 空木岳（日本百名山、うつぎだけ、2864m）

○26日移動

3:30 自宅発、東北道、北関東道、関越道、上信越道更埴JCT、中央道中津川ICを経由し、登山口のある岐阜県大桑村の伊奈川ダム着11時、距離約600km。

遠い。中津川ICは名古屋まで70~80kmの距離だ。

出かける前に越百小屋の主人に聞いたが8月16日の豪雨によって土砂崩れなどの被害があって、ダムの上の登山口までは車が入れないとのこと。その分片道30分余計にかかるとのこと。

ダム手前の道路脇に車を停め11時半出発する。3台駐まっていた。

20mほど下を流れる伊奈川や枝の沢は急流で、豪雨によって川側と山側双方の土砂崩れがあり、普及のための工事車両が通れるように土砂がよけてあった。20分ほど行くと崩れた土砂と大きな流倒木や根が折り重なって車は通れない状態になっていた。歩くにも慎重を要した。こういう状態のところをよくも登山者通行禁止にしないものだと逆に感心する。

40分ほど歩き福栄橋を渡った所で右方向への林道が終わりとなる。右手の山に取り付き、川から離れるように樹林帯の薄暗い湿っぽい荒れた山道をジグザクに登っていく。尾根筋に出ても樹林帯で、所々で樹林が切れても流れる雲で眺望は得られない。結構急な道をひたすら上る。

七合目の御岳見晴台と表示された10m平方くらいの北西方面が切れている広場があって小休止するが、雲が多く御嶽山は見えなかった。

30分弱登ると水場があり、越百小屋には水がないので補充する。さらに1時間登り少し下ると越百小屋の赤い屋根が見えてきた。17時過ぎ小屋前のベンチのある狭い広場に着くと、小屋の主人が待っていてくれた。到着が遅かったので心配していたとのこと。

別棟の小さな小屋にザックを置き、食卓のある小屋に行く。寝る部屋の入口はまた別で、それぞれ傾斜のある地形に隣り合って立っているので疲れている足には応える。

既に食事は始まっていて、おでんが付いていた。登山客8人のうち熟年のご

夫婦を案内する30代中頃のガイドさんと、60代半ば～70代初め頃の男の二人組はガイド業だが今回はプライベートでの山登りらしい。地域を異にするガイドさん3人はアルコールが回って山や有名な登山者・ガイドさん達のことを話している。遅れてきた自分は話に入り込めない。600円の350mlドライを飲みながら耳を傾ける。ボトルに入れた焼酎を持参したが、疲れのせいか飲む気にならない。

皆より早く食事を終え、翌日の昼食のおにぎり弁当を受取る。寝室の小屋で明日の準備をする。

20時には就寝する。同じ区画に二人。畳1枚分は空いている。珍しくなかなか寝付けなかった。缶ビール1本では足りなかつたか。

○27日4時起床

小屋は山間の窪地にあるため明るくなるのがおそい。霧も立ちこめている。

5時からの食事を終え、ガイドの二人組より先行し、6時に出発する。越百山山頂までは地図によると1時間となっているが調子が上がらず動悸がして低木帯の尾根筋に出るまでに1時間を要した。休憩していると二人組が追い越していく。その日は木曾殿山荘泊まりで、天候も雨の心配はなさそうなので楽勝だと思い、体調を整えることを優先し1時間近く休憩する。また荷物を軽くするため水を1リットルほど捨てる。残りはジュース類を含め2リットル。

30分かけて越百山山頂2614mの頂に立つ。小屋から1時間のところを2時間半かかった。風も穏やかになり雲もなく山頂からの展望は素晴らしい。

ハイマツに覆われた越百山は女性的な山容で、次第に標高を下げていく南に連なる連山も急峻な山ではなく樹林帯の穏やかな山々で、越百山からのぞむ北側の山々とは全く対照的だ。標高を上げていく北側の山は、ゴツゴツとした岩肌のアルペン的な山で同じ中央アルプスでもこんなに違うものだと感心する。

これから登る北側の山、アルペン的な山容の南駒ヶ岳はどっしりしていて重量感がありかっこよい。さすが二百名山だ。空木岳は見えない。北西方面の膨大な御嶽山は上部が雲に覆われている。

南東方面の南アルプス連山が雲海に浮かんでいる。左手から特徴のある丸いゴツゴツした甲斐駒ヶ岳が稜線を引く仙丈ヶ岳の左手奥に見える。その右手には日本第2の高峰北岳が三角の頭を突きだしている。さらに右手の塩見岳の右奥にうっすらと富士山もえた。見下ろすと山峡の窪地に赤い屋根の越百小屋が見えている。6月に登った藪こぎの安平路山（あんぺいじやま2363m）の連なりも眼下に見える。

ゆっくりしていると、小屋で一緒だった若いガイドさんと熟年のご夫婦が登ってきた。今回の山行は女性の山小屋泊まりの訓練とのこと。ガイドさんに自分が同定できない山のことを尋ねる。親切なガイドさんだった。3人と別れ越百

山頂を後にする。

目指すはまずは岩稜の仙涯嶺（せんがいれい）。ハイマツや背の高さを少し超えるぐらいの赤い実を付けた樹木（ナナカマド？）の間を下ったり登ったりする。柱状節理の岩が斜めに突き出ているのを間近に見る。マークの少ない岩稜などを登り仙涯嶺の頂に着く。南駒ヶ岳が近くなったのが実感できる。岩場はスリルがあって面白い。稜線歩きで体調も良くなり、ルンルンの気分だ。

一端下り岩場を越えたり巻いたりしながら何度も偽ピークを越えて12時半前最後のガレ場を登り南駒ヶ岳山頂（2841m）に着く。小屋を出てから6時間半。越百山からここまで誰とも会わなかった。山頂には身長の2倍ほどもある三角の岩を背に70cmくらいの高さの赤い屋根の社があり、手を合わせる。

山頂北側は、これから登る空木岳（2864m）を南北に挟んで中央アルプスの主脈縦走路がタテ糸のように延びていてその先に中央アルプスの盟主木曽駒ヶ岳（2956m）が鎮座している。手前に特徴のある宝剣岳（2931m）が主峰の門番のように屹立している。

小屋のおにぎりを食べていると、空木岳方面から30代後半の男性登山者が単独で登ってきた。長野県側駒ヶ根登山口からの日帰りとのこと。

9年前の平成21年10月17日、前日に麓に車中泊して妻と二人で空木岳に登ったときは、雨や道に迷ったこともあり、12時間半もかかりヘッドランプを着けて降りてきたことを思い出した。この男性は空木岳と南駒ヶ岳往復の地図のコースタイムで4時間を超えるところを加えての日帰り登山で驚くほかはない。

男性は明るいうちに登山口に戻れるかどうかなどと言いながら慌てる様子もなく写真を撮り、食事をしている。

雲が多くなってきたので13時前空木岳に向けて出発する。赤椰岳（あかなぎだけ2798m）を通過し空木岳に向かう道は岩場もあるが緩やかで比較的歩きやすくハイマツの中に点在する花崗岩の巨石を見ながら登っていく。高山植物の花々が咲いているが疲れていて花をゆっくり愛でる余裕はない。

空木岳山頂手前で休んでいると、南駒ヶ岳で話をした人が追いついてきた。やはり若い人は違う。15時に空木岳山頂に着く。

空木岳のシンボル・駒石と先程追抜いていった南駒ヶ岳で一緒にした人が迎えてくれた。駒石を背に木の標柱とともに写真に収まる。山頂周辺は花崗岩の白砂できれいだ。3人が休んでいた。

雲が次第に多くなってきたが、9年前と違って眺望が効き、長野県側の駒峰ヒュッテがすぐ下に見え、登山道も見えている。

9年前の山頂での感動的な場面を思い出した。当時の「ねじりはちまき」の文章を引用してみる。

「…木の標柱に手を合わせ、写真を撮って下山を始めた時、2枚手袋を着けた手指

が、かじかんで来たと思ったら、霧雨が突然、舞う雪に変った“雪だ！初雪だ！”…」

山ではいろんな不思議な光景に出合う。9年前の空木岳山頂での初雪“舞う雪”との遭遇もその一つである。

南駒ヶ岳の人と、山行の無事を声かけあって別れる。

自分も 15：20 木曽殿山荘を目指す。岩場をまたいだり乗り越えたり飛び降りたり、鎖場もあった。霧が次第に濃くなる。岩場が終わりザレた道をジグザグに下り 16：50 木曽殿山荘着。山荘のある木曽殿越は木曾義仲が伊那攻めの際に越えていったという伝承があるとのこと。

17 時からすぐ食事で 40 人くらいの人が既に座っている。埼玉のハイキングクラブ 15 名の到着が遅れているとのこと。我らのテーブルは単独行者の席でそんなに話は弾まない。ここでも越百小屋と同じおでんが出た。大根、さつまあげ、卵、イトコン、昆布、ガンモなど味が染みこんでいておいしかった。

グループの人たちは賑やかだ。周りの人たちは全て木曽駒方面からの人たちで朝ゴンドラに乗り千畳敷から主脈を南下縦走して木曽殿山荘に泊まり、翌朝空木岳に登り長野県側に下山すること。

埼玉のグループは暗くなつてから、うち 2 名は 19 時を過ぎて着いた。遭難しなくて良かったと皆で喜んだ。2 階の大広間にグループ毎に寝る。60 人くらいか。

○28 日 4 時起床

5 時食事、5：50 発、岐阜県側に下るのは自分一人のようだ。途中、山荘から 10 分くらい下ったところの「義仲の力水」でのどを潤して下山する。天気は下り坂で樹林帯の中には陽も差し込まず湿っぽい山だった。

山道が終わりうさぎ平の林道に 9 時過ぎに着き休んでいると雨になってきた。金沢土場 9：50 を左折し今朝沢（けさざわ）橋着 11：18。伊奈川ダム下の車を停めたところに 12 時着、雨が激しくなってきた。6 時間の下山行を終える。誰にも会わなかった。

越百小屋の主人のアドバイスに従い、中津川 IC に戻らずに、国道 19 号線を北上し権兵衛街道を経由して中央道伊那 IC から帰ることにする。

伊那市の見晴らしの湯で 3 日間の汗を流し帰路に就く。中央道、上信越道、関越道、北関東道、東北道を経由し自宅着 22 時。

今回、木曽側から登り、山小屋 2 泊で中央アルプス南部の主脈縦走山行ができて良かった。9 年前に妻と登った空木岳にも登ることができ中央アルプスの素晴らしさを再認識した大きな意義のある山行だった。南駒ヶ岳にはいつかまた登りたい。

<会社近況>

10月に入りました。朝晩、涼しくなりましたね。

先日、さつま芋と栗をいただきました。ほくほくしていておいしかったです。スーパーに行くと梨やぶどう、みかんまで販売されており、食べたい物だらけ。散歩に出れば、満開のコスモス。草むらからはコロコロ…と虫の声が聞こえてきます。新聞の折り込みチラシは、もみじ祭りと芋煮会。本格的な秋の始まりですね。

二十四節気では、「寒露」の頃です。

寒露とは、夜が長くなり露が冷たく感じられる頃。朝晩の冷え込みが次第にきつくなりますが、空気が澄んだ秋晴れの過ごしやすい日が多くなります。

この秋は夏の間なかなか出来なかったことを、楽しみたいと思います。

現在、本宮市の現場をお世話になっております。2件とも事務所から近い所にあります。たくさんの方々のお力をいただきながら、何とか頑張らせていただいております。

・・・・・・・・・・・・・・・・

おいしい♥10月

「さといも」

さといもは、さつまいもより低カロリーで、ビタミンCは少なめですがカリウムや食物繊維は多めです。カリウムは体内の余分な水分を排出してくれるのでもくみ解消に効果的といわれています。

独特のぬめり成分はタンパク質の消化を助け、粘膜を保護する効果があるそうです。

汁物に入れたり、煮ごろがしやイカや野菜と煮つけたり、そぼろあんかけもおいしいです。

・・・・・・・・・・・・

平成30年10月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢字八幡1番地1

電話0243-44-3816

<後記>

家には金魚6匹、犬1匹います

が、最近家族が増えました。

オスとメスの子猫です。

この子猫たちが、まあ～かわいいいん
です。毎日癒されています。(事務員 k)